



【 新入所員紹介 】

外国語学部英語英文学科 准教授

中村 ジェニス

出身国はマレーシアです。多言語的・多文化的な環境で育てられた私は、日本で子どもをバイリンガルに育てたい事がきっかけでバイリンガリズムの研究を始めました。最初は、心理言語学の視点から子どもの早期二言語発達を研究したのですが、その後、社会言語学の視点から民族学的調査も行いました。研究対象者は日本における国際結婚の家庭ですが、英語圏の親とフィリピンやタイなどアジア圏の親を両方調査しました。14年間に亘った研究活動から分かったのは、日本では、前者の子どものバイリンガリズムは比較的育てやすく、一方で後者のバイリンガリズムは、マイノリティ言語のステータスの問題をはじめ、様々な困難を乗り越えなければなりません。今後ま

すます多文化共生の社会になっていく日本で、国際結婚間もしくは外国人の子どものマイノリティ言語の保持は、私の関心のある課題です。

現在進行中の研究プロジェクトもマイノリティ言語の保持と関連します。日・英バイリンガルの子どもが通うウィークエンド・スクールを調査しています。ウィークエンド・スクールは、海外の日本人の子どものための補習校に類似し、普段公立の小学校に籍を置くバイリンガルの子どもたちが通う土曜日の英語学校です。ウィークエンド・スクールで英語のライティング検査を定期的に行い、子どもたちのバイリテラシー発達を測っています。週1回60分のウィークエンド・スクールの授業は、子どもたちの英語の読み書き学習を高いレベルに促進しているので、その授業方法と家庭内の学習支援について研究を進めていきたいと考えています。

外国語学部英語英文学科 助教

Esther Lovely ラブリー エスター

専門は応用文化言語学です。コミュニケーションとカルチュラル・アイデンティティの順応性に関心を持っています。

大学院時代はオーストラリアで育った若い韓国人が研究対象であり、彼らのコミュニケーションとアイデンティティの変化について研究を行いました。韓国では、1990年から、母親と子供をオーストラリアなどの英語圏の国に送ることが盛んに行われていました。この親子での移住の主たる目的は、英語習得ではありませんでしたが、特に子供は、移った先で文化的な影響を多く受けました。

研究のために参加者を集め、インタビューを通してオーストラリアに来た時から現在までの経験と、毎日の人との交流とマスメディアとの関わりについて話を聞きました。参加者の心に潜む話を引き出していくことができました。インタビューの書き起こしを読みながら大きな変化やパターンを探し、パターンや変化の原因と結果を特定しました。参加者のコミュニケーションとアイデンティティの変化にフォーカスしながら、書き起こしをケースストーリーとして書き出しました。

個人のアイデンティティは周りの人やマスメディアから影響を受けます。その影響は様々なコミュニケーションの形や方法を通して感じ取ることができます。しかし具体的にコミュニケーションの影響がどのようにして進んでいくのかには不明点があります。留学生など、国を移動する人々は、特にソーシャルメディアやスマホのアプリを通していつでもどこでも誰かと連絡をとることができます。さらに、マスメディアを通して様々な情報を得ることができるので、これらの影響をより深く調査することが求められると思います。

今までの研究は、韓国人の移民者だけをターゲットにしたものと思われるかもしれませんが、韓国人はケーススタディーであり、私はアイデンティティとコミュニケーション、特にインターネットのコミュニケーションに興味を持っています。そのため、今の研究では日本以外の国で生活したことがある日本人の経験とアイデンティティについて調べたいと考えています。

外国語学部英語英文学科 助教

Sonya Chik チックソニア

専門は選択体系機能言語学 (SFL) です。SFLでは、言語は意味を構築するための資源 (resource) として捉えています。言語がどのように多様な状況のコンテキスト (context of situation) を具現するか、そして、「資源としての言語」 (language as resource) がどのように社会的意味を作り出すのかについて研究をしています。その中、異なる言語のテキストが特定の状況のコンテキストに応じて社会的意味を作り出すために、言語体系を構成する資源を選択する際の文法構造の相違点に関心を持ってきました。

大学院では、英語、日本語、中国語が法律文書や新聞記事における文の構成と結束性についてSFLのメタ機能で分析し、研究をし始めました。その後、対人関係のメタ機能に基づいて、ムードやモダリティと発話機能との関係性を探っています。そこで、英語と日本語の対人関係の意味を具現する語彙文法の違いが分かり、その相違点は英語と日本語の言語特徴による基本的な違いであるものの、コンテキストによる言語使用域を規定する変数 (register variation) も重要な要因であることを明らかにしました。

近年、テキストの構成や修辞構造 (rhetorical structure) に興味を持ち、英語、日本語、中国語のオンラインレビューを対照的な観点から探求し始めました。オンラインレビューは個人意見や評価を示すジャンルなのですが、修辞構造や語彙文法の選択により、各言語の独自の社会文化につながる事が分かりました。今後、多様な状況のコンテキストにおけるテキストを機能的に研究することにより、言語の特性や言語と文化の関係をより深く理解していきたいと思っています。

外国語学部スペイン語学科 特任准教授

落合 佐枝

専門はスペイン語学、スペイン語教育で、近年は文法教材の執筆が中心になっています。一旦は専業主婦となってスペイン語と離れていた私がまた大学に戻ってこられたのは、語学と教育の毎月の研究会に細々ながら参加し続けてきたことが大きいように思います。特にスペイン語教育の研究会は半数以上の会員がスペイン語を母国語とする教員で、使用言語もスペイン語であったため、留学をしそびれた私にとっては、研究される内容以上に、ことばの使い方、行動パターンや人間関係の作り方などが興味深く、地球人を観察する宇宙人のようにアンテナを張っていました。

会員有志で教材を作ることになって一緒に働いてみると、さらに観察すべきことは多くなり、教科書を頼りに国内で覚えたスペイン語は隙間や勝手な思い込みがあって誤解を産むこともしばしばでした。その後「スペイン語語用論」を紹介するというお仕事をいただいて勉強してみると、ことばの「構造」ではなく「使用」を研究するというこの分野から、当時の失敗のいくつかが分析できるようになりました。

初心者用の文法教材の多くは文法学習の効率性から構造中心に作られています。日本語とスペイン語は構造的に全く違うので、これは正しい方針ではあるのですが、構造中心ゆえに抜け落ちてしまう重要な点もあります。ことばはメッセージであり、あるメッセージが適切であるためには状況に適した形式が必要であるにもかかわらず、そこが軽視されがちなのです。

こうして教科書の例文に息を吹き込みながら文法の授業を続けていますが、授業中の楽しみは疑問を抱いた学生からの質問です。質問してくれる学生が少ないのが悩みの種です。

外国語学部中国語学科 特任助教

樊 可人

専門は明清時代の俗文学です。日本が中国の文学を取り入れながら独自の文学や文化を築き上げていったことに対して強い関心があったため、大学院で遠山荷塘という江戸時代後期の人物に焦点を当て、日本人が中国文学をどのように受容したかという問題に取り組みました。その中でも中心となるのは、中国古典劇を代表する名作『西廂記』が、近世日本においてどのように受け入れられたのかという問題です。

現在は明清時代の謎語における俗文学作品の受容に関する研究を行っています。中国の明清時代では、戯曲や小説の創作が盛んに行われるようになりますとともに、灯謎や酒令のような遊びにも戯曲や小説と関わりのある内容が大量に取り込まれました。これまでに『西廂記』と志怪小説の名作『聊齋志異』を研究対象とし、民間で広く遊ばれた謎語の中からこれらの二つの作品と関わりのある内容を集めて分析することによって、同作品の受容の一端を提示しました。

今後の研究計画として、戯曲や小説の批評に関する研究を展開したいと考えています。戯曲や小説の批評に関する研究は未だ緒に就いたばかりで、研究の余地が大いに残されています。私はこれまでに『西廂記』の受容問題について考察してきたため、新しい研究課題として、「李卓吾先生」が批評を付けた『西廂記』をはじめとする一連の戯曲作品に見られる批評について考察を加えたいと考えています。

国際日本学部国際文化交流学科 助教

角山 朋子

専門はオーストリア・中欧の近代デザイン史です。デザインされたモノやデザインという行為が、時代の芸術、政治、経済、技術などの影響を受けて変化していく様相を歴史的観点から研究しています。大学院では、ウィーンの工芸品会社「ウィーン工房」(1903-32)を研究対象としました。

学部生の頃、産業革命後の社会の美的価値観の混乱を批判し生活の質を根底から見直した英国アーツ・アンド・クラフツ運動を知ったことが、デザイン史に進んだきっかけです。2000年代初頭、世界が9.11同時多発テロ事件に衝撃を受け、日本では『ソトコト』、『天然生活』といったライフスタイル雑誌が発行され始めた時期でした。大学院時代は、二度目のウィーン留学、ポーランドでの在外研究を通じ、旧ハプスブルク君主国領を中心とする中欧地域の近代芸術・デザイン運動に関する研究を深めました。同じドイツ語圏のドイツと比較し、オーストリア・デザイン史研究の蓄積は浅く、基礎的な史料や文献調査に多くの時間を費やしました。博士課程在籍中、都内の現代アートギャラリー、神奈川県立近代美術館、独立行政法人国際交流基金でインターンや嘱託勤務をしたことで、様々なアートの「現場」に身を置くこともできました。

人々がどのように理想の生活世界を形成しようとしたのか、社会構造そのものに関わるデザイン思想とその実践に最も関心があります。現在は、ウィーン工房と、「ウィーン・キネティズム」という1920年代ウィーンの前衛芸術グループの研究をしています。転換期のアーティストたちを研究するにあたり、私自身も多様な知見に触れていけるよう、今後どうぞよろしくお願いいたします。

国際日本学部日本文化学科 教授

山田 昌裕

専門は日本語学(文法)です。特に格(Case)に関して通時的に研究をしております。現代語では「私が手紙を読むとき」のように、「ガ」や「ヲ」を用いることが普通ですが、古代語では「我の文を読むとき」のように、いわゆる格助詞が標示されない場合が一般的です。なぜ格助詞を標示しないシステムから格助詞を標示するシステムに切り替わったのか、その実態と経緯、またその理由・社会背景などについては、いまだ解明されていません。博士論文のテーマは「格助詞「ガ」の通時的的研究」でしたが、それでも格助詞「ガ」の変遷の一端を示したにすぎません。引き続き古代語から現代語にかけての格標示システムの変遷について研究をしていきたいと思っております。

前任校は小規模な女子大であったため、ゼミ飲みやゼミ合宿、サークルや部活などを通じた学生との交流は思うようにできませんでした。この度、共学である神奈川大学でお世話になることになったので、学修の場以外でも学生との交流が図れるのではないかと楽しみにしております。

私の研究対象言語は日本語ではありますが、格(Case)の標示は言語類型的研究などとも深く関わっており、他言語との対照研究や、文化と言語のインターフェースなど、周辺的分野の研究も視野に入れなくてはなりません。本センターでは、多方面の研究がされておりますので、これからいろいろと勉強させていただきたいと考えております。よろしくお願い致します。